東日本大震災津波被災小・中学校の状況

2014年　8月　5日

釜石市立釜石東中学校

大西　歩実〈香川大学大学院教育学研究科〉
北林　雅洋〈香川大学教育学部〉

【文献】

(1) 片田敏孝『命を守る教育』PHP研究所 2012年

【場所】

大槌湾から800mの位置に鵜住居小学校と隣合わせに建つ学校で，脇には鵜住居川が流れている。

住所:岩手県釜石市鵜住居町19-28-3

※現在校舎は取り壊され、釜石市立釜石中学校を間借りして再開している。

赤い範囲:釜石市

赤い範囲:鵜住居町

緑の範囲:釜石東中学校

【東日本大震災による被害】

津波により校舎が全壊。

【震災当日の様子】

地震が起きたとき、釜石東中学校はちょうど授業が終わり、生徒たちが課外活動を始めた頃であった。揺れが収まると教師の「逃げろ」という声をきっかけに全員が当初決められていた避難場所であるグループホーム「ございしょの里」へと全速力で走った。その際、鵜住居小学校の児童、鵜住居保育園の保育士と園児、近隣住民も加わって避難している。鵜住居小学校は当初、校舎の上階に避難する指示を児童に出していたが、釜石東中学校の生徒が避難している様子を見て、学校外避難に切り替えた。

地震発生から9分後、「ございしょの里」に全員到着した。その後、建物脇の崖が崩れかかっているのに気づき、この場所に避難し続けるのは危険だという判断の元、さらに高台にある老人福祉施設へと避難した(地震発生から25分後)。全員が老人福祉施設へ避難し終えた30秒後に津波が老人福祉施設の手前で止まった。

津波を確認し、最終的にさらに高い場所にある石材店まで全員で避難した(地震発生から44分後)。

釜石市は長期的な津波防災教育の計画に取り組んでおり、釜石東中学校は、津波防災教育のモデル校であった。防災教育の取り組みとして、年数回の避難訓練や防災マップ作りなど内容を取り扱っており、生徒はその経験や知識を使って助かったのである(1)。

鵜住居町(2013/9/3撮影)

【調査して言えること】

一次避難場所のございしょの里は学校から800mほど離れているが、標高は6mほどしかない。また、ございしょの里の手前の道路は1.5mほど標高が下がる箇所があり、津波の避難場所として安心できる場所ではない。また、二次避難場所の老人福祉施設は学校から約1Kmの距離にあり、標高は13mほどで、ちょうど津波が到達した高さであった。最終避難場所となった石材店は、学校から1.6Kmほど離れており、標高は約44mあり、安全な避難場所としては、石材店が最も適している。しかし、学校から石材店までは大人の足で早歩きでも約18分かかるので、津波が到達するまでに生徒が避難するためには、実践的な避難訓練と学校周辺の地形の知識が必要である。

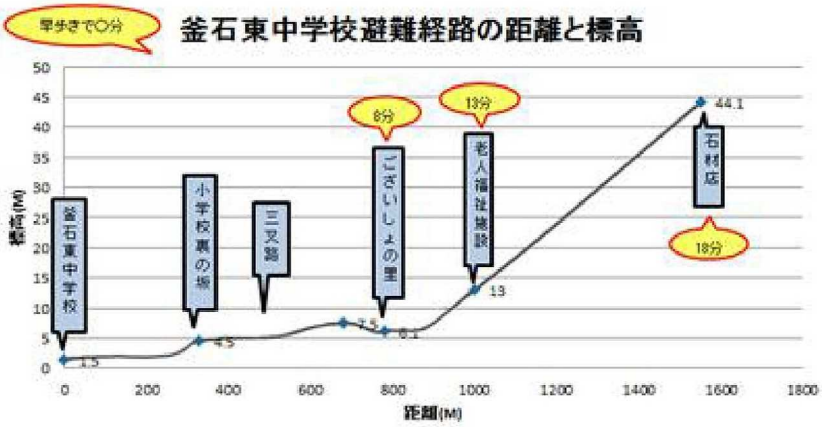
鵜住居川の堤防と釜石東中学校の位置関係(2013/9/2撮影)

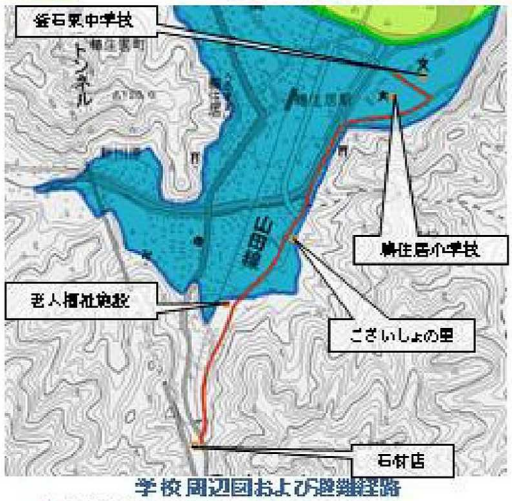
石材店から見た避難経路(2013/9/2撮影)

老人福祉施設から見たございしょの里(2013/9/2撮影)

※ございしょの里の手前で避難経路の標高が下がっているのが分かる。

ございしょの里の崩れかかっていた崖(2013/9/2撮影)





学校周辺図および避難経路

赤:避難経路
緑:津波浸水予想域
青:東日本大震災による津波浸水域